

# クレディ・スイスとスイス経済の発展

田 中 文 憲\*

Credit Suisse and the development of the Swiss economy

Fuminori Tanaka

## 要 旨

スイスは九州ぐらいの面積しかない小国であるが、1人当りGDPでは世界トップクラスの豊かな国である。スイスが豊かになった要因は19世紀の経済発展にあるが、その経済発展を支える重要な役割を果たしたのが、クレディ・スイスを始めとする銀行である。

本稿では、なぜクレディ・スイスのような銀行が誕生したのか、またクレディ・スイスはどのようにして生き残ったか、さらにクレディ・スイスを中心とする銀行がどのようにスイス経済の発展に貢献したのかについて分析を試みた。

その結果、クレディ・スイスが必要とされた最大の要因は鉄道建設に伴う巨大な資金調達にあったこと、また鉄道建設やクレディ・スイス設立などの動きの中心にアルフレート・エッシャーという傑物がいたことがわかった。また、クレディ・スイスが生き残った理由がベンチャー・キャピタル型銀行からユニバーサル銀行への機敏な転換にあったこと、その結果、産業界に「総合的」(ユニバーサル)に関与することができスイス経済の発展に大きく貢献したこともわかった。さらにスイスという「条件」をうまく利用して「金融王国」スイスの礎を築いたことも明らかになった。

## はじめに

スイスは日本の九州ぐらいの面積しかない小国でありながら、1人当りGDPがつねに世界トップクラスに入る世界有数の豊かな国である<sup>1)</sup>。しかし、スイスは近世まで比較的貧しく、口減らしのために「血の輸出」と言われた傭兵や海外移住の歴史を持っている<sup>2)</sup>。このようなスイスが、豊かになったのは19世紀以来の急速な経済発展のお陰である。

本稿では、スイスの経済発展の鍵を握ったのは銀行であるとの立場から、特にスイス3大銀行の中で最も早く設立されたクレディ・スイス<sup>3)</sup>を中心に据え、クレディ・スイスのような銀行がなぜ生れ、またこれらの銀行がスイス経済の発展にどのように貢献したかの検証を試みた。

## ・クレディ・スイス設立の背景

### 1. 19世紀の状況

19世紀以前のスイスは比較的貧しく、特に田舎は人口の増加を吸収できなかった。18世紀初頭のスイスの人口は約120万人で、18世紀末には約205万人となったが、増加分約85万人のうち、スイスに残れたのは50万人で、5万人は主に北アメリカへ移民、30万人が傭兵として出稼ぎに出ざるをえなかった<sup>4)</sup>。

しかし、都市部では着実に産業が立ち上がり始めていた。もっともこうした産業の立ち上げに力があったのは海外からの避難民である。これらの避難民の多くが、ジュネーブやバーゼル、チューリッヒなどに資本と技術をもたらした。その理由は、1546年の法令(Édit)で避難民の受け入れは、金持ちか有能であることを条件としていたからである。要するに受け入れる市が当該人物が利益、名誉、評判をもたらすことができるか、その職業が不可欠である場合に限ったということである<sup>5)</sup>。ちなみにスイス人のこのスタンスは現在でも変わっていない。避難民の多くはカトリックに圧迫されたプロテスタントであったが、第1波は16世紀の半ばに起きた。特にサン・バルテルミーの虐殺(1572年8月24日未明)前後に主にジュネーブに約5,000人が押し寄せた。この人数は当時のジュネーブの居住者に匹敵したと言われている。そしてさらに大きい第2波は1685年のルイ14世によるナントの勅令廃止によって起きた。この結果、1720年までに、ジュネーブには合計100,000人以上、チューリッヒには約20,000人、ベルンには約20,000人のユグノーと呼ばれるプロテスタントが押し寄せた<sup>6)</sup>。彼らのうち時計職人はジュネーブへ、絹織物業者はチューリッヒやバーゼルへ、学者はバーゼルなどの大学都市に赴き、そこに定着していった。それまでスイスの産業は繊維産業中心で、それも亜麻からリンネルを織るぐらいのものであったが、ユグノーのお陰でチューリッヒで絹織物が本格的に生産できるようになったし、バーゼルでは絹リボンの生産が一大産業に育つことになった。それ以前、絹織物はイタリアやフランスから輸入していただけにこれは大きな進歩であった<sup>7)</sup>。

一方、綿工業も着実に発展していった。特にスイスの東部において盛んになった。しかし、当初は家内工業的に紡績機1~2台から始まった。しかもチューリッヒのような都市はギルド支配が強かったため、グラールス州のようなギルド支配の及ばない地区から立ち上った。たとえば1714年に教会執事であったアンドレス・ハイデッガーなる人物がチューリッヒから糸紡ぎの女工をグラールスに連れて行って生産したと言われている<sup>8)</sup>。

19世紀に入った頃から、徐々に工場での生産が出現してきた。1802年にヴィンタートゥールのヨハン・ヤコブ・リーターらがピュルフリンゲンに機械紡績工場を作ったのを初め、ザンクト・ガレンではスイス初の株式会社組織の紡績会社が設立された。1805年には、後に大会社となるエッシャー・ウィス(Escher Wyss)が生産を開始している。これに関して1つ注目すべき点は、創業者のハンス・カスパール・エッシャーはイギリス製のミュール精紡機を模倣して、紡績機械を作ってしまったことである。これは、当時スイスに特許法が存在しなかったことが最大の原因であるが、多くの事業者が最先端の技術を模倣によって獲得していたことは事実である<sup>9)</sup>。

エッシャー・ウィスはスイス最初の本格的な工場と言ってよい存在であるが、創業の資金はエッシャー家の人々と親戚の者によって拠出された。エッシャー・ウィスは1807年スイスで最初の綿布を生産することに成功したが、彼らの資金が自己金融で賄われていたことに注意を要する<sup>10)</sup>。当時、事業が自己金融で行われていたことを示すもう1つのエピソードが、ブラウン・ポベリーの創業にまつわるものである。創業者のチャールズ・ブラウン（イギリス出身）とワルター・ポベリー（ドイツ出身）は外国人ということもあり、出資をしてくれるような人物とはまったくコネがなかった。そこでポベリーがチューリッヒの裕福な絹織物業者のコンラート・バウマンの娘と結婚することができ、義父が設立資金50万フランを融資してくれたので、やっと「ブラウン・ポベリー有限会社」を設立することができたのである<sup>11)</sup>。

これらのエピソードは、当時もっとも有力な資金調達の方法が、新しい出資社員を迎えることであった事実を示している<sup>12)</sup>。

では、銀行は存在したのであろうか。もし存在したとすればどんな活動をしていたのであろうか。スイスの銀行はジュネーブから始まる。15世紀にはフィレンツェの10以上の銀行がジュネーブに支店を設けた。中でも1425年メディチ家が支店を設けてローマカトリック教会の資金輸送の中継地になったことから繁栄した。その後イタリア勢が拠点をフランスのリヨンに移したため一時期寂れたが、17世紀になると有力な個人銀行（Privatbankier / banque privée）が次々に出現した<sup>13)</sup>。個人銀行に金を預けたのは、1つは傭兵事業で儲けた人々で、ルツェルンやベルンといったカトリック州で州の政治を牛耳っていたいくつかの家族であり、もう1つは、交易で儲けた大商人たちであった<sup>14)</sup>。ところが、個人銀行はこれらの資金をスイス国内にはほとんど投資しなかった。投資のほとんどが外国の政府や大企業に振り向けられたのである。その理由はいくつかあるが、まず、すでに述べたように、事業に必要な資金は自分で調達するという風潮がスイス国内にまだ根強く残っていたことが指摘できる。次に、18世紀にはすでに相当の資本蓄積があり、しかも事業家の借金を忌避する習性もあってスイス国内の金利水準が周辺国に比べて低かったことが挙げられる。さらに新しく設立された企業の多くが脆弱であったことも忘れてはならない。スイスでも産業革命は急速に進んだため、だれでもすぐに起業家になれるという幻想を生んだ。このため経済危機が襲った1811年 - 1812年および1816年 - 1817年には多くの企業（ほとんどが繊維産業）が倒産したのである<sup>15)</sup>。

もっとも、チューリッヒでは、1830年～40年代にかけて他人資本の導入が少なからずあったとの指摘がある。当時新設や拡張された大紡績工場はほぼ例外なく「分割貸付」（Partialanleihe）という形でバーゼルのForcart Weiss & SöhneやJ. Franz Sarasin, Speyr & Ehingerなどの銀行家から借入れを行っている<sup>16)</sup>。この当時、チューリッヒでは機械化と工場の大規模化の波が押し寄せていたのである。こうした状況下では、従来のように利益を再投資するというだけではもはや出資者の支援を得られなくなり、小さな企業は廃業するか、外部資本を導入しても拡大するかの選択を迫られるようになっていたのである。また、チューリッヒの「商工会議所」（Directoire commercial）<sup>17)</sup>が企業の機械化に対して公的支援を行ったことも相俟って、銀行も初めて企業への貸出しに目を開くようになっていった<sup>18)</sup>。

## 2. 鉄道建設ブーム

企業の機械化と工場の大規模化は、従来の自己金融中心の資金調達では間に合わなくなり、必然的に銀行から融資を受けざるを得ない状況を作り出した。一方、銀行も企業への融資がビジネスになることに気付き始めたことは既に述べたが、後にクレディ・スイスのような株式会社組織の大銀行を必要とするほどではなかった。

では、大銀行が必要になった原因は何かと言えば、それは鉄道建設ブームの到来である。

イギリスから始った鉄道建設はやがてブームとなりヨーロッパ大陸にも広がった。しかし、スイスは鉄道建設に関しては大きく遅れを取るようになった。その最大の原因は、スイスがまだ連邦ではなく「盟約者団」(Eidgenossenschaft)であったことにある。「盟約者団」とは言わば国家連合であって、主権はカントン(Kanton)にあった。したがって鉄道という遠隔地間を結んで、人や荷物を運ぶというシステムの建設は各カントン(州)の利害が絡み、しかも利害を調整する中央政府が存在しなかったために、建設を推進するのが困難であった。

スイスで最初の鉄道は1844年に敷設されたが、これを実施したのはアルザスの鉄道会社“Société des chemins de fer d'Alsace”でアルザスのサン・ルイ(St. Louis)からパーゼルまでであった。結局スイスの鉄道はこの内フランス国境からパーゼルまでのわずか1,800メートルであった<sup>19)</sup>。

スイス国内だけの鉄道は1847年8月7日にチューリッヒとバーデンの間に開通した25kmの通称Spanischbrötlibahnである。実はこの鉄道は当初1837年にパーゼル～チューリッヒ線として計画され、チューリッヒとアールガウ政府は許可を出したものの、パーゼルが反対したためチューリッヒ～バーデン間のみを先行着工したといういわく付きのものであった。しかし、この鉄道は資金調達が困難になって1841年末に一旦自主的に清算された。次の動きは1846年3月で「北部鉄道」(Nordbahn)が設立され、チューリッヒ～バーデン間の25kmが営業を開始した。結局1848年の連邦成立以前の鉄道と言えばこの25kmにすぎなかったのである<sup>20)</sup>。

1847年連邦化を図ろうとする自由主義急進派(Radical-Liberale)とカトリック保守派の分離同盟(Sonderbund)との間に「ゾンダーブント戦争」(Sonderbundkrieg)が起きた。自由主義急進派がこの内戦に勝利をおさめると翌1848年9月には連法憲法を成立させ、スイスは連邦国家となった。連邦憲法第21条によって、連邦政府は事業主体として鉄道事業に直接関与できるようになったが、国鉄方式(Staatsbau)でやるのか私鉄方式(Privatbau)でやるのかで、連邦政府とカントンの間で論争が起きた<sup>21)</sup>。

この時、この論争に決着をつけ、私鉄方式でやる方向に引っ張ったのが、後述するアルフレート・エッシャー(Alfred Escher)である。この時A.エッシャーは国民議会(Nationalrat)の議長(Präsident)であったが、1849年11月12日の定例会議(Grosse Kammer)の開会演説において、連邦大学(Hochschule)の創設と鉄道建設は「スイスの死活問題」(Lebensfrage der Schweiz)であると強調した。この結果、国民議会内に11名から成る「鉄道委員会」(Eisenbahn Kommission)が設置され、A.エッシャーは委員長に選出された<sup>22)</sup>。A.エッシャーは終始一貫して私鉄方式を主張して論陣を張ったが、その最大の理由は、彼が自分の地元チューリッヒに誘致しようと奔走していた連邦大学と国鉄(連邦鉄道)が財政的に競合することをおそれ、連邦政府による鉄道建設に反対したからだと言われている<sup>23)</sup>。さらに1851年5月に設置されていた「大学問題に関する

る専門委員会」(Expertenkommission zur Hochschulefrage)が、連邦大学建設計画は鉄道問題を片づけてから提出すべきとの意見であったため、いよいよ鉄道建設を私鉄方式で推進することで肚を固めたのである<sup>24)</sup>。

「鉄道委員会」内部の議論は、国鉄方式か私鉄方式かで真二つに割れたが、結局過半数の6人の賛成で国鉄方式が委員会としての案になったが、1852年7月の国民議会の裁決の結果は、国鉄方式案22票、私鉄方式案68票となった。これを受けて、鉄道事業を民間企業とカントンに委ねる「連邦鉄道法」(Eisenbahngesetz vom 28. Juli 1852)が成立した<sup>25)</sup>。

これを受けて、A・エッシャーは地元チューリッヒで東スイスの鉄道建設に向け、活動を開始した。まず1852年の9月、チューリッヒ州議会(der Grosse Rat)で鉄道がスイスおよびチューリッヒ州の「生存条件」(Lebensbedingung)であり「自己保存」(Selbsterhaltung)に不可欠のものであるとぶち上げ、「私的な鉄道建設を公的手段で支える」との結論を引き出すのに成功した<sup>26)</sup>。

カントン(州)の財政的支援を背景に、早速チューリッヒからヴィンタートゥール(Winterthur)を經由してボーデン湖畔のロマンスホルン(Romanshorn)に至る「チューリッヒ=ボーデン湖鉄道」(Zürich-Bodensee-Bahn-Gesellschaft)が計画された。計画内容のうち特に重要なのが財政面であった。資金調達については、資本金150万フランのうち、400万フランをチューリッヒ州、トゥールガウ州とチューリッヒ市、ヴィンタートゥール市が負担、600万フランをスイスの投資家に出資してもらい、残りの500万フランを外国の投資家に出資してもらう案を立てたが、当時外国資本をスイスに呼び込むのは容易ではなかった。そこでドイツ(ケルン)、フランス、イタリア(ミラノ)などで“Roadshow”を実施し、地元チューリッヒの有力紙Neue Zürcher Zeitungに寄稿するなどして必死に資金を集め、ついに設立に成功した。A・エッシャーは1852年12月20日のチューリッヒ州冬期議会で、当該会社の設立が成功したことを報告するとともに、チューリッヒ州をスイス鉄道網の中心にする青写真を掲げた<sup>27)</sup>。

これをきっかけに、スイスの鉄道建設は一気に加速する。まず、A・エッシャーは「北部鉄道」と「チューリッヒ=ボーデン湖鉄道」を接続することの戦略的重要性を訴え、両社の合併を画策した。1853年9月12日両社は合併して、「スイス北東鉄道会社」(Schweizerische Nordostbahn-Gesellschaft)が誕生し、A・エッシャーは社長に選出された。さらに、A・エッシャーはチューリッヒの南東部に展開する「スイス南東鉄道」(Schweizerische Südostbahn-Gesellschaft)への資本参加を主張するなど、一貫してチューリッヒを中心とする鉄道網建設の旗振り役を果たしたのである<sup>28)</sup>。

一方、バーゼルを中心にオルテンやベルンを結ぶ「スイス中央鉄道」(Schweizerische Centralbahn-Gesellschaft)が設立され、スイス東部では、「ザンクトガレン=アッペンツェル鉄道」(St. Gallisch-Appenzellische Eisenbahn)が、チューリッヒ東南部では「グラット渓谷鉄道」(Glattalbahn)などが建設された。またスイス西部でもOuest-Suisse, Ligne d'Italie, Franco-Suisse, Jura Industrielなどの鉄道が次々開通した<sup>29)</sup>。

こうして、わずか1,800メートルから始ったスイスの鉄道網は1860年までに一気に拡大し、総延長1,053kmに達した。人口当りの路線延長距離ではフランスやザクセンを上回るなど、短期間に遅れを取り戻したのである<sup>30)</sup>。

しかし、こうした鉄道建設ブームにあって常に問題であったのが資金調達の困難さである。鉄道建設のような巨大なプロジェクトに資金を出す銀行はスイス国内には存在しなかった。この結果、実際には多くの鉄道会社が外国の資本を取り込んでいる。なかでも積極的に関与したのがフランスの2つの銀行グループで、1つはロスチャイルド系のRéunion Financièreで、もう1つが後述するクレディ・モビリエ(Crédit Mobilier)である。この2つの銀行グループは「独占」による収益の向上を狙い、彼らが影響力を行使しうるスイスの鉄道会社の合併を活発化した。1854年にはクレディ・モビリエが「中央鉄道」と「北東鉄道」の合併を試みたり、1857年には、Réunion Financièreがスイスのほぼすべての鉄道会社の合併を試みたりした。これらの試みは実現しなかったが、1857年4月20日、Réunion Financièreの主導によって、「ザンクト・ガレン＝アッペンツェル鉄道」と「グラット渓谷鉄道」および「南東鉄道」が合併して、「連合スイス鉄道」(Vereinigte Schweizerbahnen)が誕生した<sup>31)</sup>。

このように、鉄道建設に伴う大量の資金調達の必要性、さらに、外国の銀行に資金的に依存することによって、経営権が奪われ、ひいては国家の安全保障上の問題すら生じかねない状況を見て、スイス国内でこれらの資金調達ニーズに応えうる銀行の設立が望まれるようになってきた。A・エッシャーは特にロスチャイルドに代表されるフランスの有力銀行(haute banque)を警戒し、できるだけ彼らの影響力を排除したいと考えた<sup>32)</sup>。これが、A・エッシャーがクレディ・スイス設立を思い立つ直接の原因となったのである。

### 3. アルフレート・エッシャー

クレディ・スイスはアルフレート・エッシャー(Alfred Escher)によって設立されたが、彼の業績はそれだけではない。ここで、A・エッシャーなる人物について概観しておきたい<sup>33)</sup>。

A・エッシャーは1819年2月20日に誕生している。古くて裕福な家柄の出身である。祖父のハンス・カスパー(Hans Caspar Escher)はスイスで有数の繊維および機械製造メーカー、エッシャー・ウィス(Escher Wyss)の共同創業者である。父のハインリッヒ(Heinrich Escher)はスイス出身でフランスで財をなしたホットィンガー(Hottinguer)の下で修業した実業家で、アメリカとの商取引で活躍し、後にホットィンガーのオーナー(Teilhaber)の一員になった人物である。

A・エッシャーは当時のヨーロッパの上流階級や大ブルジョアがそうであったように、優秀な家庭教師から教育を受けている。幼少時から自然科学に興味を持っていたが、1837年、設立後間もないチューリッヒ大学(Universität Zürich)に入学した時は法学部を選んでいる。学生時代、彼は「ツォフィンギア」(Zofingia)と呼ばれる学生団体に参加して、活発に活動した。1839年にはチューリッヒ支部長、1840年には全国委員長(Centralpräsident)になった。1842年には博士論文(Über die zu Ciceros Zeiten geltende Lehre von den Zeugen)が合格し、チューリッヒ大学で博士号を取った最初の学生となった。

A・エッシャーの政治的な成功は「ツォフィンギア」の活動を通じて培われたと言われていいる。1844年～47年にかけてチューリッヒ大学で私講師(Privatdozent)として教鞭をとるかたわら、政治活動を開始した。A・エッシャーの政治家としての才能はすぐに開花した。26歳でチューリッ

ヒ大評議会（Zürcher Grossrat）議員に選ばれたのを皮切りに、29歳でチューリッヒ政府の閣僚（Zürcher Regierungsrat）になり、翌年30歳で知事（Regierungspräsident）に選ばれている。また1848年の連邦成立直後、最年少で国民議会（Nationalrat）議員に選ばれ、翌年30歳の若さで国民議会議長（Nationalratspräsident）になっている。

結局、A・エッシャーは1844年から死亡する1882年まで38年間チューリッヒの州議会（Kantonsrat）の議員であり続け、6回議長に選ばれている。また1848年から55年にかけてチューリッヒ政府の閣僚になり、その内4年間知事の座にあった。さらに、1848年から82年まで34年間国民議会の議員であり、4回議長になっている。

A・エッシャーの特徴は政治家であると同時に偉大な経済人であったことである。彼は鉄道がスイスにとって死活問題であることを力説し、遅れていたスイスの鉄道網を他国並み、いやそれ以上にしかも短期間で充実させるのに辣腕を振った。1853年には合併してできた「北東鉄道」の社長になって、自ら経営の前線に立った。また同時並行的に進んでいた連邦大学問題も、1854年チューリッヒに「理工学校」（Eidgenössisches Polytechnikum）<sup>34</sup>）を設立することで決着させた。

金融面では、「北東鉄道」の資金繰りのために、さらにフランス金融資本からの独立を図ろうとして、1856年にクレディ・スイスを設立、さらに1857年には、保険会社Rentenanstaltを設立している。彼の最後の大きな仕事は長年の懸案であったアルプス山脈を貫通する鉄道の建設であった。1869年彼は「ゴットハルト・プロジェクト」（Gotthardprojekt）をまとめ上げるのに成功した。

A・エッシャーの真骨頂は政治と経済を結合させたことにある。彼はその強大な政治力を経済活動に遠慮なく注ぎ込んだ。この結果、スイスのインフラ整備が一気に進み、スイス経済発展の礎を築いたと言っても過言ではない。

しかし、A・エッシャーのこうしたやり方は、一方で強い反発も呼んだ。彼は「独裁者」（Diktator）とか「国王アルフレート 世」（König Alfred I）などと揶揄されもした。晩年のA・エッシャーは必ずしも幸福ではなかった。過労が祟って何度も大病を患い、また生命をかけた「北東鉄道」と「ゴットハルト鉄道」の事業が経営危機に陥り、双方の経営から手を引かざるを得なくなったりと不運の連続であった。最後の年は糖尿病が悪化し、疔（Furunkel）やよう（Karbunkel）に苦しみながら、1882年12月6日早朝この世を去った。

A・エッシャーこそ19世紀後半のスイスの経済・政治を支配した人物であると言える。

## ・クレディ・スイスの設立と展開

### 1. モデルとしてのクレディ・モビリエ

クレディ・スイスはクレディ・モビリエを手本にして設立されたが、そもそもクレディ・モビリエとはいかなる銀行であったのか見ておく必要がある。

クレディ・モビリエ（Crédit Mobilier）は1852年9月9日、ボルドー生れのエミール（Emile）とイザーク（Isaac）のペレール（Pereire）兄弟によってパリに設立された銀行である。

19世紀前半のフランスでは長期資金を産業に供給できる体制にはなっていなかった。当時のフ

ランス金融界を牛耳っていたのは、Rothschild（ロートシルト、英語読み：ロスチャイルド）、Hottinguer、Vernes、Malletなどの有力個人銀行（haute banque）であった。彼らは貴族や地方の名望家から金を預かり、主にフランス国債や外国債への投資、手形の割引などを行った。企業家や金融業者への信用貸しは行わず、実行する場合は土地・建物の担保を取った<sup>35</sup>。

このような状況下、パリに出てきたペレール兄弟は工業と商業の発展のための銀行が必要だと考えた。エミールは後に大蔵大臣になるアシル・フルド（Achille Fould）と組んで、1830年「割引銀行」（Comptoir National d'Escompte）を設立し、大口の資金需要にシンジケートを組んで対応した。特に折りから高まっていた鉄道建設に集中的に関与した。彼らは1835年のパリ～サンジェルマン・アンレイ間の鉄道建設や1845年の「北部鉄道」（Chemin de Fer du Nord）の設立を主導した。しかし、ジャム・ドゥ・ロートシルト（James de Rothschild）率いるロスチャイルドの力は依然として強かった。1848年の「2月革命」後、不況になるとロスチャイルドなど有力個人銀行は資金を引き上げ始め、ペレール兄弟は窮地に立たされた。これを救ったのが、1851年12月のクーデターで権力を掌握したルイ・ナポレオンである。ルイ・ナポレオンはペレール兄弟の大胆さと才能を見抜き、ロスチャイルドに対抗できる新しい銀行設立の構想を持っていたペレール兄弟にゴーサインを出した。これを受けて1852年9月9日ブノワ・フルド家（Benoit Fould）において「公共事業銀行」（Banque des Travaux Publics）が起草された。フランス大蔵省は“banque”には銀行券の発行が含まれることから“banque”の文字をはずすことを要求したため“Société Générale de Crédit Mobilier”に名称を変更した。同年11月18日勅令によって設立許可が下り、ここにクレディ・モビリエが誕生したのである<sup>36</sup>。

クレディ・モビリエは鹿島茂がいみじくも指摘しているように、今日一般的に言われる「ベンチャー・キャピタル」<sup>37</sup>である。つまり企業の設立に出資者として加わったり、有望そうな企業に資本参加して、取得した株式を自己勘定で保有し、値上りしたところで売り抜け利益を得るというものである。

しかし、クレディ・モビリエはそもそもほかの銀行とは違ったコンセプトで作られた銀行であった。

ペレール兄弟は後に空想的社会主義者と呼ばれるようになるサン・シモン伯（Comte de Saint-Simon）の教えに共感した「サン・シモン主義者」であった。サン・シモンは、国家をある種の大きなアトリエと理解していた。そこでは企業家も労働者も職人も芸術家もさまざまな機能を担って協働するというのである。したがって、そこでは人間による人間の搾取は起こらないことになる。実は、ペレール兄弟はクレディ・モビリエを使って、サン・シモン主義的な「普遍的協働」（association universelle）を実現しようとしていたのである<sup>38</sup>。

具体的には、「オムニウム」（Omnium）と命名した特殊な社債を発行してあらゆる経済活動を行う企業を系列化、総合化しようとするものであった。しかし、社債の発行は大蔵省によって拒否されてしまった。これはロスチャイルドがクレディ・モビリエの全企業支配を懸念して追い落としにかかったからである。ロスチャイルドはフランス政府に対してクレディ・モビリエに社債の無限発行権を与えることは、フランス銀行のほかに発券銀行を作ることだと主張してこれを拒否させたのである<sup>39</sup>。

社債の発行を拒否されたクレディ・モビリエは、そのような制約のない外国でクレディ・モビリエ型の株式組織による銀行を設立することによってペレール兄弟の理想を実現しようとする。ドイツで後にドイツ型「ユニバーサル銀行」の原型となる「ダルムシュタット銀行」(Bank für Handel und Industrie in Darmstadt)を設立したのを始めスペインなどへ展開していった<sup>40)</sup>。

しかし、この時ロスチャイルドを中心に、クレディ・モビリエ追い落とし作戦は着々と進んでいた。たとえば、オーストリアではロスチャイルドがクレディ・モビリエを出し抜き、地元の貴族と金融業者と共同で、クレディ・モビリエ型の「オーストリア商工業信用銀行」(Österreichische Credit-Anstalt für Handel und Gewerbe)を設立してしまった。さらに、フランス国内でも1856年1月にベンチャー・キャピタル的な“Réunion Financière”を設立し、鉄道建設事業でクレディ・モビリエと激しく競い合うようになった。この罅迫り合いは海外にも持ち込まれ、たとえばスイスでもクレディ・モビリエが「西スイス鉄道」や「中央スイス鉄道」と協定を結んだのに対抗してRéunion FinancièreはA・エッシャー率いる「北東鉄道」と協定を結んでいる<sup>41)</sup>。このRéunion Financièreからの独立が、A・エッシャーにクレディ・スイスを作らせる原因となったことはすでに述べた通りである。

クレディ・モビリエは投機的とも言える超積極的な姿勢で、起業や資本参加を展開すると同時に証券市場で相場を操作し、これからも莫大な利益を得た。1855年には40.74%という驚くべき高配当をしている<sup>42)</sup>。

しかし、クレディ・モビリエの没落は意外に早くやってきた。投機的な証券売買が1866年の相場暴落で損失を出し、さらにスペインでの投機的な鉄道建設が窮地に陥ったことから体力は急速に落ちていた。そしてマルセイユでの土地開発事業が命取りとなった。1862年エミール・ペレールはマルセイユ市長との間で「帝国街」(Rue Impériale)の開発で協定を結んだ。これはスエズ運河の開通によるマルセイユの繁栄を先読みした投機であった。1863年パリに設立していた不動産会社と「マルセイユ港湾会社」を合併させ、「帝国不動産会社」(Cie impériale immobilière)を設立し、これに「帝国街」の土地・建物を買収させたが、買い手がつかず失敗し、大きな損失を出した。この事業にクレディ・モビリエは資本金の60万フランを上回る79万フランの融資を行っていたので、一挙に倒産の危機に追い込まれることになった。ペレール兄弟はフランス銀行に支援を求めたが、フランス銀行は37.5万フランの融資と引き換えにペレール兄弟の退陣を求めた。こうして、1867年10月22日ペレール兄弟がクレディ・モビリエから退陣し、15年の短い活動に終止符を打ったのである。<sup>43)</sup>

クレディ・モビリエの活動は15年間と短かったが、その後のヨーロッパ大陸の銀行制度に与えた影響ははかり知れないものがある。

## 2. クレディ・スイスの設立

クレディ・スイスはクレディ・モビリエを手本にチューリッヒに設立されたが、当時のチューリッヒの金融機関と言えば、1755年に設立された“Stadtwechsel”と呼ばれる公営の両替商(実際は銀行業務を行った)や、チューリッヒの財務長官だったヨハン・ヤコブ・ロイ(Johann-Jacob Leu)が1798年に設立した個人銀行“Bank Leu & Cie”や1805年設立の「貯蓄銀行」(Sparkasse

der Stadt Zürich) さらに1836年に設立された“Bank in Zürich”ぐらいしかなかった。これらの銀行はいずれも小さく、鉄道建設や工場拡張に伴う巨大な資金需要にはとても対応し切れなかった<sup>44)</sup>。

1853年以来「北東鉄道」の経営者であったA・エッシャーは資金繰りに苦勞していた。そこでロスチャイルド系のRéunion Financièreの力を借りざるを得なかったが、傲慢な態度をとる外国銀行に依存し続けることを忌ましく思い、さらに、鉄道という重要な施設が外国資本に支配されることは国益にも反すると考えた。そこで自ら、巨大な資金需要に応えうる「産業銀行」(Industriebank / banque d'affaires)の設立を決意したのである。

当時、クレディ・モビリエの成功を聞いてこれを模倣した銀行設立が相次いだ。スイスでも、ジュネーブの企業家であり政治家でもあったジェームズ・ファジ (James Fazy) によって1853年にBanque Générale Suisse de Crédit Foncier et Mobilierが設立されていた<sup>45)</sup>。

A・エッシャーがクレディ・スイスを設立する直接の切っ掛けは、A・エッシャーと個人的親交があった、当時ライプツヒ在住でザクセンのスイス総領事カスパー・ヒルツェル＝ランペ (Caspar Hirzel-Lampe) から、1856年3月に設立されていた「全ドイツ・クレジット銀行」(Allgemeine Deutsche Creditanstalt in Leipzig)の子会社としてチューリッヒに銀行を設立しないかとの話が持ち込まれたことにある。A・エッシャーは経営権が保てないこと、また国益がおかされることを危惧して、この申し出を拒否した。しかし、代案として、スイスの銀行を作り、ライプツヒの銀行に資本金の半分を出資してもらい、15人の取締役のうち2人をドイツ側から出すことを提案し、受け入れられた。こうして、1856年6月28日クレディ・スイスの定款(設立目的～農業、商業および産業の振興に資すること、資本金(名目)20百万フラン)がチューリッヒ州の政府議会(Regierungsrat)に提出され、7月5日に承認された<sup>46)</sup>。

これを受けて7月14日に設立委員会が開かれ、頭取にA・エッシャー、副頭取に法律家で州政府の閣僚でもあったリュッティマン (Johann Jakob Rüttimann) そしてその他の取締役が選ばれた。さらに資本金(名目)を30百万フランに引き上げること、最初の株式募集は資本金15百万フラン分とし、その内7.5百万フランはライプツヒの銀行、3百万フランを設立者が引き受け、1.5百万フランを州政府に、3百万フランを一般投資家に割り当てることも決定された。7月16日には後の大銀行もわずか6人で営業を開始したのである<sup>47)</sup>。

株式の一般公募は7月17日から19日まで行われた。当初チューリッヒ政府に割り当てられていた分を政府が拒否したことから、この分も一般公募に回され、結局4.5百万フラン分、額面500フランの株式9,000株が売り出された。申し込みの際には、1株につき10%(つまり50フラン)の現金もしくは有価証券の預託が義務づけられたが、申し込みが殺到した。最終的に442,539株の申し込みに達した<sup>48)</sup>。この大成功の原因をW. A. Jöhrは、A・エッシャーの類いまれな組織力と政策遂行能力、さらに個人としての権威(カリスマ性)に対する一般投資家の信頼があったからとしている<sup>49)</sup>。一方、Joseph Jungは当時のチューリッヒの一般大衆は株式会社組織の会社をよく知らないまま、投機の対象にしたことを指摘し、それが、前年の1855年にクレディ・モビリエが40.74%の異常な高配当をしたことの影響だとしている<sup>50)</sup>。またロレンツ・ストウッキは、スイス人の勤勉で質素な生活が生み出した巨大な資本蓄積が投資先を求めて噴出したからと見る<sup>51)</sup>。

### 3. クレディ・スイスの発展と挫折

クレディ・スイスの業務内容は、クレディ・モピリエとほとんど同じで、主なものは、貸出し、会社の設立およびその経営、新設および既存の会社への資本参加、有価証券の引受け、貴金属・有価証券・商品の売買、手形の割引、預金の受け入れ、自行債券の発行、為替などであった<sup>52)</sup>。

まず私企業向け引き受け業務であるが、1857年6月に「スイス西部鉄道」発行の100万フランの債券引受けに参加したのが最初で、次に1857年9月「北東鉄道」の100万フランの案件にドイツのWürttembergische HofbankとPrivatbank Doertenbach & Komp.と共に参加し、600万フランを引受けている。クレディ・スイスは最初から「北東鉄道」のメインバンク（Hausbank）として活動し、この頃「北東鉄道」が必要とした資金の99%はクレディ・スイスが直接か、もしくはクレディ・スイスが主幹事となって市場から調達された。また「中央鉄道」の社債の引受けにもたびたび参加している<sup>53)</sup>。

次に、公共債の引受けであるが、クレディ・スイスにとって最初の案件である1857年のソロトゥルン州（Kanton Solothurn）向け公共債は実施されずに終わったが、1861年から1864年の間にルツェルン州、ウーリ州、フリブル州（Kanton Freiburg / Canton Fribourg）の公共債引受けに参加した。1875年から1880年代にかけては、市や町村（Gemeinde）の資金調達に参加した。（たとえば、ローザンヌ、ジュネーブ、ヴィンタートゥール、プレムガルテン、ブルクドルフなど）なかでも、地元チューリッヒでは圧倒的な力を発揮し、州債では1873年、74年にそれぞれ400万フランを引受け、また市債では1889年の3½%利付の大きな起債の引受け・販売に成功したことによって、その後数十年間、クレディ・スイスはチューリッヒ市の資金調達において主導権を握った。さらに連邦政府の資金調達においても、たびたび主幹事として活躍したのである<sup>54)</sup>。

次に会社の設立および資本参加について見てみると、1857年生命保険会社“Schweizerische Lebensversicherungs-und Rentenanstalt”を設立した。この会社は実質的にはクレディ・スイスの一部門というべき存在であった。その証拠に、この会社が結んだすべての保険をクレディ・スイスが保証したからである。1861年には、株式会社組織の保険会社への最初の資本参加である「ヘルヴェティア火災保険会社」（Helvetia Feuerversicherungsgesellschaft）へ出資した。1863年にはクレディ・スイスの主導で「スイス再保険会社」（Schweizerische Rückversicherungs-Gesellschaft）を設立した。さらに1869年には絹や綿の取扱い業者らと運輸保険会社である“Schweiz” Allgemeine Versicherungs-Aktiengesellschaftを設立し、資本金の1/4に当たる500万フランを出資している<sup>55)</sup>。

また、銀行の設立にも多数参加している。たとえば、1856年Bank in Luzern、1856年Bank in Burgdorf、1862年Basler Handelsbank、1863年Banque Commerciale Genevoiseなどがある。さらに1871年から1875年にかけては、Basler Bankverein、Banca della Svizzera Italiana (Lugano)、Banca Napolitana di Credito e di Deposito (Napoli)、Banca Italo-Svizzera (Genova)、Bank für Tirol und Vorarlberg (Innsbruck)、Berliner Produkten-und Handelsbank、Bank in Mülhausen (Alsace)、Österreichisch-Sweizerischer Credit-Vereinなど周辺国の銀行設立にも積極的に関与した<sup>56)</sup>。

このように、まさにクレディ・モピリエを手本とした「ベンチャー・キャピタル」的な良く言

えば積極的な、悪く言えば投機的な業務展開は、やがて大きな危機となって現われた。

1856年の設立後の10年間は「試行錯誤」の時代と言われるほど、明確な判断基準もなく儲かりそうな事業に闇雲に突っ込んで行ったというのが実態で、このため「高い授業料」を払う羽目に陥ったのである。

たとえば、起業・資本参加・企業買収業務においては、中には「エーリコン」(Oerlikon)や「シャッペ」(Industrie-Gesellschaft für Schappe)のように大企業に成長したものもあるが、1857年商人たちと組んで設立した輸出会社(Schweizerische Exportgesellschaft)などはすぐに行き詰まり、後に清算を余儀なくされるといった例が頻出した。また棉花とアカネ染料(Krapp)を中心とする商品取引も損失を生んだ<sup>57)</sup>。

また商業銀行分野では、スイスで最初に大規模に当座預金業務(Kontokorrentrechnungen)(つまり当座貸越)を始めたのは良いが、十分な信用調査もなしに「無担保貸し」(Blancokredit)を伸したため、1857年～1860年の当座貸越(Kontokorrentdebitoren)のうち無担保貸しの割合は平均43%に上った。このため、かなりの焦げ付きが発生した<sup>58)</sup>。

次に証券業務であるが、クレディ・スイスの設立目的からすると無理もないことであったが、当初は「北東鉄道」の株式を大量に購入し、保有した。さらに利回りの良さから外国株式にも触手を伸し、アメリカの公共債や鉄道会社の株式や社債を購入した。そのほか、ドイツやオーストリアの鉄道株などにも投資した。この結果、初期には証券ポートフォリオがクレディ・スイスの総資産の約30%を占めた。さらにポートフォリオの中身を見ると、株式の割合が債券より圧倒的に大きかった。1959年には株式の割合が90%に達している。またスイス国内証券と外国証券の割合は、創業から1862年まで3対1から2対1の間で変動した<sup>59)</sup>。しかし、1860年代アメリカの南北戦争の影響で景気後退が起き、1866年の普墮戦争がさらにスイスのみならず世界経済を混乱させた。このためスイス(特にチューリッヒ州)の綿産業も大きな打撃を受けた<sup>60)</sup>。またアメリカの鉄道株なども値下りした。こうしたことから、証券ポートフォリオからも相当の損失を出すことになった。

この結果、1867年度の決算で、クレディ・スイスは19世紀において最初で最後の赤字転落となった。これはさまざまな不良債権の償却を迫られたためで、赤字額は830,000フランに上った。準備金(Reservefonds)から捻出して4½%の配当は実行したものの、クレディ・スイスは操業後10年にして大きな挫折を味わったのである<sup>61)</sup>。

#### 4. ユニバーサル・バンクへの転換

1867年の赤字決算を機に、クレディ・スイスは経営方針を変更した。まず経営陣の責任をとってトップのカスパー・フーバー(Caspar Huber)が退任した。新しい取締役会で外国証券の保有高を減らすこと、起業ビジネスや長期投資を回避し、短・中期貸出しに重点をおくこと、手形割引や手形引受業務を拡大すること、当座貸越業務は引き続き注力するが、信用極度の設定を厳格に行うこと、勃興しつつあった中産階級によって蓄えられた資金を取り込むリテール業務(Retailgeschäfts)を推進することなどが決定された。要するに、クレディ・モビリエ的な「産業銀行」から「商業銀行」を合せ持つ「ユニバーサル銀行」へと転換したのである<sup>62)</sup>。

こうした経営方針の転換が端的に現われたのが、1870年代の鉄道危機に際してである。1877年「北東鉄道」が業績不振から無配に転落し、倒産の危機に陥った。この時、クレディ・スイスは過去の経緯やしがらみを一切排除し、直接救済に向って深みにはまることを避けたのである。具体的には1878年クレディ・スイスが主導して「スイス鉄道銀行」(Schweizerische Eisenbahnbank)なるコンソーシアム銀行(クレディ・スイスは資本金の20%(20百万フラン)取締役会に3名を出した)を作り、この銀行に資金を注入させてリストラを実行し、「北東鉄道」を倒産から救った<sup>63)</sup>。それと同時にクレディ・スイス自身も救われたのである。これは信用リスクに対して厳しく臨む方針を貫いた賜物である。

1880年代に入ると、鉄道会社向け金融に代って一般企業向けへの関与が活発になった。特に個人企業の株式会社への転換が盛んになったことから、これに積極的に参加した。この切っ掛けとなったのが1881年の「新契約法」の制定である。この法律によって企業の再構築、合併、拡大などの一大ブームが起きた<sup>64)</sup>。

ちょうどこの頃、クレディ・スイスにとって大きな変化が訪れた。それは1882年12月6日のA・エッシャーの死去である。1883年4月5日A・エッシャーの後を襲ったのが、カール・アベック＝アルター(Carl Abegg-Arter)である。アベック＝アルターは就任するとすぐに「鉄道にもはや煩わされることなく、貿易および産業向け金融の拡大に注力する」との方針を打ち出した。こうした業務拡大の号令を受けて、クレディ・スイス内部では、与信管理体制の整備が行われた。それが1885年の定款の改正である。この改正によって、1883年1月1日発効の「新契約法」と整合性を持った権限規定が作られた。たとえば銀行の「自己勘定による取引」や「長期投資」について権限が明確にされた。さらに、創立者たちの特権も廃止された。また、設立に当って資本金の半分を出したライブチヒの銀行が取締役2名を指名する権利も廃止された。また1人の株主が株主総会において500票以上を、また全体の1/5の票を行使しえないように決められた<sup>65)</sup>。

定款の改定と同時に「業務規定」も改訂された。その1つに「金融委員会」の設置がある。この委員会は自行が金融取引や証券取引を行う前に、それが適正かどうか判断をするものである。

この定款の改正によって、商業貸出しと顧客向け証券業務は大きく伸びた。そのお陰で証券の販売力(placing power)も増大し、引受けシンジケート団にしばしば呼ばれるようになり、主幹事としてシンジケート団をまとめる力もつけていったのである<sup>66)</sup>。

## ・スイス経済発展への貢献

### 1. スイスのインフラ整備に寄与

クレディ・スイスの設立目的が鉄道建設資金の調達にあったことはすでに述べたが、スイスにおける鉄道建設はある種特別な意味を持っている。それは何より鉄道建設そのもの、また機関車などの製造を通じて土木技術の開発や機械製造技術の開発を促進したし、当時スイスの主力産業であった綿や絹工業の発展に大きく貢献した。また経済的のみならず、政治的意味合いも大きかった。当時のスイスは1848年に連邦になったばかりで、まだまだゲマインデ(Gemeinde)や州(実

質的には国家)中心の考え方が強く、国家として何かをするというのは困難な状況であった。こうした状況を打破したのが鉄道建設であった。ゲマイデとデマインデ、州と州の間の難しい調整をこなしながら鉄道網を拡大し、やがて東西南北すべての路線がつながる過程で、それまでスイス人やスイス国という意識があまりなかった人々に「スイス」というアイデンティティを与えたとと言える。

こうした鉄道建設事業の1つの頂点と言えるのが、「ゴットハルト・プロジェクト」(Gotthard projekt)である。

「アルプス山脈を貫く道が欲しい」これは大げさに言えば第2次ボエニ戦争(紀元前218年)のハンニバルや紀元前58年にガリア遠征に出たユリウス・カエサル以来の夢であった。しかし、19世紀に入ってもこの夢の実現は難しかった。1つは技術的なもので、当時全長15kmのトンネルを掘るのは至難の技とされていたのである。もう1つは資金調達であった。巨額に上るであろう建設資金を調達する目処が立たなかったこと。さらに、もし実行するとなるとスイスのみならず北のドイツと南のイタリアの協力を得る必要があるが、その外交交渉をどう進めるのか見当もつかなかったことなどが挙げられる。

こうした困難をはねのけ、巨大プロジェクトを立案したのがA・エッシャーであり、その実現のために実務に当たったのがクレディ・スイスである。A・エッシャーはスイスの政治家としてドイツとイタリアの説得に当り、両政府の協力をとりつけることに成功した。1869年「ゴットハルト契約」(Gotthardvertrag)が結ばれ、1871年にはこの事業を担う「ゴットハルト・コンソーシアム」(Gotthardkonsortium)が結成された。その中心になったのが同年12月6日に設立された「ゴットハルト鉄道会社」(Gotthardbahn-Gesellschaft)で社長にはA・エッシャーが就任した。資金調達は予想総工費187百万フランのうち、スイス、ドイツ、イタリア政府が85百万フランを補助金として拠出した残り102百万フランを国際シンジケート団が担うことになった。このうちスイス・グループはクレディ・スイスが主幹事となり、クレディ・スイス自身も8.5百万フランと多額の引受けを行った。この間A・エッシャーとクレディ・スイスは国際コンソーシアムと「ゴットハルト鉄道会社」それに各国政府の間の連絡と調整に奔走した。こうして1872年秋によいよ工事が開始された。しかし、給料の上昇、材料の値上り、技術上の問題などから、当初の工事費予想を超過したため、「ゴットハルト鉄道会社」は倒産寸前に追い込まれ、その後再建されたものの、A・エッシャーは社長を辞任、クレディ・スイスの頭取からも一時身を引くといった事態になりはしたが、1882年春ゴットハルト・トンネルはついに完成し、鉄道も開業にこぎつけることができた<sup>67)</sup>。

この巨大プロジェクトの成功を通じて、スイスのみならず、ヨーロッパ全体が南北を貫く大動脈を手に入れたことになる。これは経済的・政治的にもスイスの存在感を示すことになった。さらにクレディ・スイスはこのプロジェクトの主役として、巨大シンジケートの組成、多額の引受け資金の販売(プレースメント)をやり遂げ、国際的にも有力な銀行に成長していく切っ掛けをつかんだのであり、スイスのほかの銀行の戦略にも大きな影響を与えたのである。

## 2. 世界的企業の誕生に寄与

スイスは小国にもかかわらず、世界的に有名な企業が少なくない。ここではクレディ・スイスがその発展に関与したいくつかの事例を取り上げてみたい。

まず、今やスイス最大の企業であり、世界有数の食品会社である「ネスレ」(Nestlé S.A.)であるが、1843年にフランクフルトからアンリ・ネストレ (Henri Nestlé) なる人物がレマン湖畔のブベール (Vevey) にやってきて、乳児食の製造を始めたのがもとになっている。やがてネストレはこの会社を“Nestlé”という商標と共に地元の金融グループに売却してしまった。一方、1866年アメリカのチューリッヒ駐在領事であったチャールズ・ペイジ (Charles Page) がアメリカから兄弟を呼び寄せ「アングロ＝コンデンスミルク株式会社」(Anglo-Swiss Condensed Milk Co.) を設立して、コンデンスミルクの製造を始めた。やがて1905年、この両社が合併して「ネスレ」が誕生し、今日に至っている。この合併を仲介したのが当時クレディ・スイスの頭取 (General direktor) であったウィルヘルム・カスパー・エッシャー (Wilhelm Caspar Escher) とスイス・フランス銀行 (Banque Suisse et Française) の代表取締役であったブベール出身のバンジャマン・ロシエ (Benjamin Rossier) であった<sup>68)</sup>。

次に、電気と工作機械製造で有名になった「エーリコン」であるが、クレディ・スイスはペーター・エミール・フーバー (Peter Emil Huber) が1876年に「エーリコン工作機械製作所」(Werkzeug- und Maschinenfabrik Oerlikon) を設立した当時からメイン・バンクとして関わり、1898年にペーター・エミール・フーバーが個人所有していた会社を株式会社にする時にもクレディ・スイスが主導してほかの銀行にも資本参加を呼びかけ、この株式会社への転換を成功させた。「エーリコン」はその後鑄造部門をゲオルク・フィッシャー (Georg Fischer) に売却、工作機械部門は独立させ、後にエミール・ビュルレの許でスイスを代表する武器製造会社 (Oerlikon-Bürhle) となった。また、「エーリコン」(Maschinenfabrik Oerlikon) 本体は電気事業に専念し、スイス最初の市街電車を走らせた、スイス最初の電気機関車を走らせたことでも知られる<sup>69)</sup>。

もう一つ、スープで有名な「マギー」(Maggi) について見ておきたい。

グラールス州の医者であったフリドリッヒ・シューラー (Fridolin Schuler) とケンプトル (Kempttal) の製粉業者のユリウス・マギー (Julius Maggi) が、栄養価の高い簡易食品の製造を始め、エンドウ豆とインゲン豆のスープで評判を得て、1886年ケンプトルに「マギー合資会社」(Kommanditgesellschaft Julius Maggi & Co.) を設立したのが始まりである。この会社の設立に関与し、資金も提供したのが当時クレディ・スイスの取締役 (Direktor) であったゲオルク・シュトル (Georg Stoll) である。「マギー」は4年後の1890年に株式会社に転換されるが、これを主導したのもゲオルク・シュトルおよびクレディ・スイスであった<sup>70)</sup>。

もう一つ電力業への貢献について触れておきたい。19世紀末から第一次世界大戦にかけて鉄道や工場が電化され、都市に電灯がついたことから電力事業が大発展した。スイスにおいて、クレディ・スイスは当初から積極的に関与し、1891年「エーリコン」と「エッシャー・ウィス」と共にスイスの水力利用に関する調査機関を立ち上げたのを皮切りに、1894年には、ライン川を利用したスイス最初の大規模発電所の建設に参加した。この発電所そのものはドイツの“ Allgemeine Elektrizitäts-Gesellschaft ” (AEG) によって設立されたが、電力供給を実行するための電力会社に

資金繰りをつける金融会社が計画された。1つはベルリンに作られたが、翌1895年チューリッヒに「電気事業銀行」(Bank für elektrische Unternehmungen)が設立され、クレディ・スイスが主に出資した。また、1907年までクレディ・スイスがこの銀行を経営した<sup>71)</sup>。

スイスにおける電力業の発展は産業界全体の下支えとなったが、ほかにアルミニウム工業の発展という良い副産物も生み出したのである。

### 3. 「金融王国」の基礎づくりに貢献

今日、スイスと言えば「金融王国」というイメージが強いが、このイメージも実はクレディ・スイスと後に3大銀行と呼ばれる、1897年設立の「スイス銀行会社」(Schweizerischer Bankverein)<sup>72)</sup>と1912年設立の「スイス・ユニオン銀行」(Schweizerische Bankgesellschaft)<sup>73)</sup>の働きによって作られたと言っても過言ではない。確かに古くから有力な個人銀行は存在したが、彼らはスイス国内外の一部富裕層に知られていただけで、大きな力にはなり得なかった。ではクレディ・スイス(および他の2大銀行)の成功の理由は何であろうか。これについては本稿ですでに分析して来たが、目をより広い範囲に向けると別の理由が見てくる。

1つは、スイスが2度の世界大戦を通じて「永世中立国」しかも国民皆兵制による武装中立をヨーロッパのみならず全世界に印象づけることに成功したことである。また半直接民主主義に基づく政治的安定や強くしかも安定した通貨スイス・フランも世界中からお金をスイスに引きつけた。さらに「銀行秘密」を法律で義務づけたことも忘れてはならない<sup>74)</sup>。一方、金持ちになっても相変わらず質素な暮らしで国内に蓄積された巨額の資金は運用先を求めることになった。クレディ・スイスなどは早くから国内外の協調融資団の組成や証券引受けシンジケートの組成、販売の仕方についてノウハウを積み上げ、スイスを資金の「回転台」(Drehscheibe)にすることに成功した。資金が回転すればその都度利益が上るという寸法である。

さらにクレディ・スイスなどが生き残り繁栄したのは、状況に応じて機敏に変化できたからである。クレディ・スイスと同時期にスイス国内だけでクレディ・モピリエをモデルにした銀行が6つ設立されたが、クレディ・スイス以外はすべて行き詰り破産するか他行に吸収されている。クレディ・スイスが生き残ったのは、「ベンチャー・キャピタル型」銀行に早い段階で見切りをつけ、「ユニバーサル銀行」へと舵を切ったからである。

スイスの銀行(特に3大銀行)は1960年代イギリスのポンド危機に際し、当時の陰の大蔵大臣であったハロルド・ウィルソンから「チューリッヒの小鬼」(Gnomes of Zurich)なる仇名をもらうまで力をつけたのである<sup>75)</sup>。

## おわりに

本稿では、クレディ・スイスを通して、スイス経済の発展に銀行がいかに大きな役割を果たしたかについて分析した。この分析を通じてアルフレート・エッシャーという稀有な人物の偉大さを改めて思い知らされた。いかなる土地、いかなる時期においても時代を切り拓くのはやはり先見

性のある強力なリーダーであるとの思いが一層強くなった。またクレディ・スイスの生き残り作戦には瞠目させられた。どのビジネスでもそうであろうが、銀行業においても、地の利、人の利をよくわきまえることが大切であることに気づかされた。本稿執筆中にアメリカの大手証券会社「リーマンブラザーズ」破綻のニュースが飛び込んできた。日本においても闇雲に「アングロ・サクソン流」を追うのを考え直す時期に来ているようである。

## 注

- 1) 鈴木正俊：経済データの読み方 新版、岩波書店、2006年 p.3  
2004年度のスイスの1人当りGDPは47,923ドルで世界第3位である。
- 2) Jean-François Bergier : Histoire économique de la Suisse, Editions Payot, Lausanne, 1984 pp.46-50
- 3) スイスの慣例で公用語の3カ国語と英語の表記があるが、2006年1月1日よりロゴがCredit Suisseに統一されたこともあり、本稿ではクレディ・スイスを用いる。ちなみにドイツ語：Schweizerische Kreditanstalt、フランス語：Crédit Suisse、イタリア語：Credito Svizzero、英語：Swiss Credit Bankとなる。
- 4) ロレンツ・ストウツキ：スイスの知恵、サイマル出版会、(吉田康彦訳)1974年 p.4
- 5) J-F. Bergier : op. cit. p.54
- 6) ibid. pp.54 ~ 55
- 7) ロレンツ・ストウツキ：前掲書 p.17、pp.27 ~ 28
- 8) 同上 p.28、pp.30 ~ 31
- 9) 同上 p.35
- 10) 同上 p.60
- 11) 同上 pp.161 ~ 162
- 12) 黒澤隆文(a)：近代スイス経済の形式、京都大学学術出版会、2002年、p.249
- 13) J-F. Bergier : op. cit. pp.301 ~ 305, p.309
- 14) ibid. p.306
- 15) ibid. p.309  
J-F. Bergier : op. cit. p.181
- 16) 黒澤隆文(a)：前掲書 p.249
- 17) J-F. Bergierが“sorte de Chambre de Commerce”としているのでそれに倣ったもの。
- 18) J-F. Bergier : op. cit. p.195, p.192
- 19) ibid. p.287  
Joseph Jung(a) : Alfred Escher 1819-1882 ~ Aufstieg, Macht, Tragik ~ Verlag Neue Zürcher Zeitung, Zürich, 2007 p.162  
黒澤隆文(b) : スイス鉄道網の形成過程 ~ 十九世紀の鉄道政策と経済空間 ~ (森田安一編：スイスの歴史と文化、刀水書房、1999年 所収) p.207
- 20) Joseph Jung(a) : op. cit. p.163  
黒澤隆文(b) : 前掲書 pp.207 ~ 209
- 21) Joseph Jung(b) : Alfred Escher 1819-1882 ~ Der Aufbruch zur modernen Schweiz ~, Verlag Neue Zürcher Zeitung, Zürich, 2006 p.173

- 黒澤隆文(b) : 前掲書 pp.212 ~ 214
- 22) Joseph Jung(a) : op. cit. p.166
- 23) 黒澤隆文(b) : 前掲書 p.218
- 24) Joseph Jung(a) : op. cit. pp.173 ~ 174
- 25) ibid. pp.173 ~ 174
- 黒澤隆文(b) : op. cit. pp.216 ~ 217
- 26) Joseph Jung(a) : op. cit. pp.190 ~ 191
- 27) ibid. pp.189 ~ 191
- 28) ibid. pp.192 ~ 194
- 29) 黒澤隆文(b) : op. cit. p.219
- 30) 同上 p.218
- 31) Joseph Jung(a) : op. cit. pp.200 ~ 203
- 黒澤隆文(b) : 前掲書 pp.222 ~ 223
- 32) Joseph Jung(a) : op. cit. p.198
- 33) A . エッシャーの人物像とその業績についてはJoseph Jungの精緻な仕事がある。特にAlfred Escher 1819-1882 ~ Der Aufbruch zur modernen Schweiz, 2006 Teil 1. Leben und Wirken pp.11 ~ 311
- 34) 後に「連邦工科大学」( Eidgenössische Technische Hochschule ) となる。1900年には偉大な物理学者アインシュタインが卒業している。( 天野健太郎 : アインシュタイン伝、新潮文庫 pp.26 ~ 33 )
- 35) Joseph Jung(b) : op. cit. p.737
- 鹿島茂 : 怪帝ナポレオン 世、講談社、2004年 pp.199 ~ 202
- 36) Johann Plenge : Gründung und Geschichte des Crédit Mobilier, Verlag Detlev Auvermann KG, Glashütten im Taunus, 1976, pp.36 ~ 37
- 鹿島茂 : 前掲書 pp.202 ~ 203, pp.206 ~ 207, pp.215 ~ 216
- 37) 鹿島茂 : 前掲書 pp.202
- 38) 同上 pp.222 ~ 223, p.25
- Joseph Jung(b) : op. cit. p.738
- 39) 中川洋一郎 : 暴力なき社会主義? ~ フランス第二帝政下のクレディ・モビリエ~, 学文社、2004年 pp.6 ~ 7
- 鹿島茂 : 前掲書 pp.222 ~ 223
- 40) 中川洋一郎 : 前掲書 pp.96 ~ 97
- 41) 同上 pp.111 ~ 112, p.114
- 鹿島茂 : 前掲書 pp.227 ~ 229, pp.230 ~ 232
- 42) Johann Plenge : op. cit. p.120
- 43) 中川洋一郎 : 前掲書 pp.126 ~ 128
- Joseph Jung(b) : op. cit. p.739
- 鹿島茂 : 前掲書 pp.238 ~ 239
- 44) J-F. Bergier : op. cit. p.309
- W. A. Jöhr : The Swiss Credit Bank 1856-1956, a hundred years in the service of the Swiss national economy, the Swiss Credit Bank, Zurich, 1956 (Schweizerische Kreditanstalt 1856-1956, Hundert Jahre im Dienste der Schweizerischen Volkswirtschaft ) p.12
- Joseph Jung(b) : op. cit. pp.733 ~ 734
- 45) ibid. p.739

- 46) *ibid.* pp.742 ~ 747  
W. A. Jöhr : *op. cit.* p.15
- 47) *ibid.* pp.15 ~ 16  
Joseph Jung(b) : *op. cit.* p.747
- 48) *ibid.* p.766  
W. A. Jöhr : *op. cit.* p.16 W. J. Jöhrは申し込み総数を436,539株としている。  
ロレンツ・ストウキ：前掲書 p.109
- 49) W. A. Jöhr : *op. cit.* p.16
- 50) Joseph Jung(b) : p.766, p.771
- 51) ロレンツ・ストウキ：前掲書 p.109
- 52) W. A. Jöhr : *op. cit.* p.17  
Joseph Jung(b) : *op. cit.* p.812
- 53) *ibid.* p.821
- 54) *ibid.* pp.820 ~ 821  
W. A. Jöhr : *op. cit.* p.27
- 55) *ibid.* p.22  
Joseph Jung(b) : *op. cit.* p.826
- 56) *ibid.* p.827
- 57) *ibid.* pp.817 ~ 819  
W. A. Jöhr : *op. cit.* p.22
- 58) *ibid.* p.23  
Joseph Jung(b) : *op. cit.* p.838
- 59) *ibid.* pp.821 ~ 825
- 60) W. A. Jöhr : *op. cit.* p.63
- 61) *ibid.* p.64  
Joseph Jung(b) : *op. cit.* p.820, p.841
- 62) *ibid.* p.820, pp.839 ~ 840  
W. A. Jöhr : *op. cit.* p.65
- 63) *ibid.* p.65  
Joseph Jung(b) : *op. cit.* pp.836 ~ 838
- 64) W. A. Jöhr : *op. cit.* pp.26 ~ 27
- 65) *ibid.* pp.66 ~ 67
- 66) *ibid.* p.67
- 67) *ibid.* pp.19 ~ 20  
Joseph Jung(b) : p.836
- 68) Lorenz Stucki : *Das heimliche Imperium ~ Wie die Schweiz reich wurde ~*, Verlag Huber Frauenfeld,  
1981, pp.245 ~ 250
- 69) *ibid.* pp.258 ~ 261
- 70) *ibid.* pp.252 ~ 254  
Joseph Jung(b) : *op. cit.* p.835
- 71) W. A. Jöhr : *op. cit.* p.30  
ロレンツ・ストウキ：前掲書 p.120

- 72) Hans Bauer : Swiss Bank Corporation 1872 ~ 1972, Swiss Bank Corporation, Basel, 1972 参照  
1895年 Basler BankvereinがZürcher Bankvereinを吸収合併。  
1896年 Schweizerische Unionbank in St. Gallen を吸収合併。  
1897年 1月 1日 Schweizerische Bankvereinに名称変更、1897年 Basler Depositen-Bankを吸収合併。
- 73) R. Streble, G. Trepp, B. Weyermann : Ganz oben ~ 125 Jahre Schweizerische Bankgesellschaft,  
Limmat Verlag Genossenschaft, Zürich,1987 参照  
1912年10月17日 Bank in WinterthurとToggenburger Bankの合併によって誕生
- 74) 田中文憲 : スイスにおけるプライベート・バンキングの発展、奈良大学紀要第31号、2003年 pp.5~9
- 75) J-F. Bergier : op. cit. p.317

## Summary

With about the same total land area as Kyūshū, Switzerland is one of the smallest countries in the world. In term of per capita GDP, however, it is one of the richest. Switzerland's wealth was brought about by economic development in the 19th century, in which banks--including Credit Suisse--played an important role.

This paper attempts to analyze the factors behind the founding and the rise of Credit Suisse, including its contribution to the Swiss economy. The analysis reveals that Credit Suisse was established in order to provide capital financing for the construction of railroads, booming at that time through the promotion of Alfred Escher, a great politician and entrepreneur. The analysis also shows that Credit Suisse's continued survival is due to its quick and smart conversion from a "venture capital" type of bank to a "universal" bank.

Together with other banks, Credit Suisse contributed greatly to the development of the Swiss economy and helped establish the basis of the so-called "Kingdom of Finance".